

# 郷土資料館の

# お宝探訪

Treasure  
8

## 旧土山駅で再利用された「古いレール」



▲古いレールを使った土山駅の跨線橋



▲米国カーネギー社製のレール



▲官営八幡製鉄所製のレール

鉄道唱歌「汽笛一声新橋を…」と歌われた新橋（東京）―横浜間の鉄道開業は、明治5（1872）年のことでした。鉄道は文字どおり、2本のレールを敷設した鉄の道の上を車両が走るといふもので、それまでの移動方法を根本的に変えるものとして、画期的な移動手段となりました。

車両を走らせるために必要なレールですが、明治時代の初めごろは国内で鉄鋼製品を生産する技術がなかったために、遠くヨーロッパやアメリカからの輸入品が使われました。日本でのレール生産は、明治政府の殖産興業のスローガンのもとに、福岡県の八幡に設けられた官営製鉄所で20世紀の最初の年となった明治34（1901）年のことです。ただし、はじめのうち国産品のレールが不足していたので、日本製と輸入レールが、

郷土資料館の大事な仕事のひとつに、播磨町の歴史を彩る様々な資料の収集や保管があります。本年度は、数ある資料館の収蔵品のうち、代表的なものを紹介していきます。広報はりまの掲載月にあわせ、関係資料を展示します。ぜひ本物を見に来てください。

播磨町郷土資料館 ☎079(435)5000

昭和時代の初めごろまで併せて使われていたのが実情のようです。

さて、郷土資料館では山陽鉄道（現JR山陽本線）で使われていたレールの製造会社や規格を示す字が刻印された部分を保管しています。レールはもともと車両を走らせるためのものですが、第二次世界大戦前後の物不足などの理由から、使用済みの古レールが様々な施設に再利用されました。その代表的なものは、ホーム上屋や跨線橋、フェンスなどの骨組みの材料としての利用です。

写真の2本のレールも、平成15（2003）年まであったJR土山駅の向かい側のホームへ行くための跨線橋の骨組みを支えていたものです。

写真左上のレールは、「CARNegie 1904」という文字が印されています。最初の「CARNegie」は、

アメリカの鉄鋼会社（現USスチール）としてよく知られています。「1904」は製造年で、日露戦争が始まった明治37年にあたります。太平洋を渡ってアメリカから輸入されたレールだということがわかります。

写真右下のレールは、「NOT5A 1908X」と印されたもので、「◎」は官営八幡製鉄所のマーク（丸スマック）、「NOT5A」はレールの規格、「1908X」は製造年で明治41年製の国産品であることがわかります。こうした比較的新しい時代の資料も、次々に失われているのが現状で、最近になってようやく「近代化遺産」とか「産業考古学」として、注目されるようになってきました。このレールも、わが国の近代化を支えた鉄道の歴史を物語る証人として貴重な資料となっています。

播磨町郷土資料館 館長 井守徳男

町の人口 10月1日現在 (住民基本台帳人口+外国籍人口)

34,775人(+30人) 男…17,060人(+14人) 女…17,715人(+16人) 世帯数…14,129世帯(+14世帯)

